



医学部進学に導いた  
「よき医療人」を育てる  
オーダーメイドの指導法

YMS取締役  
七沢 英文先生

医学部に強い塾・予備校

YMSの強みの根幹は、創立以来37年間、全医学部の入試問題について傾向と対策を行ってきた豊富な情報量にある入試の解答速報は、当日か翌日には公表する。

「その速さと大学数は日本一であると自負しています」

なぜ、解答速報にこだわるのか。「受



# 137名中110名を 医学部進学に導いた 「よき医療人」を育てる オーダーメイドの指導法

本科生の80%以上が例年医学部に合格するYMSだが、2018年度入試における医学部最終合格者数は212名、YMS本科生137名中、重複合格者数は110名という高い実績を挙げた。快進撃が続く背景について、YMS取締役の七沢英文先生に聞いた。

「この解答速報は、春期講習を受ける次年度の受験生にも有効だ。赤本が出回る数ヵ月前の4月から志望校の最新の出題傾向を研究することができます」

また、担任制による指導も特筆す

べきだろう。単にきめ細かい指導と

いうだけでなく、担任もまた常に学

び続け、生徒を伸ばすためにどう指

導するのか、併願校をどうするのか、

一人ひとりオーダーメイドの指導を

行うという。

「講師は週1回、生徒指導会議に

参加し、指導法についてそれぞれプレ

ゼンテーションし、互いに質問やアド

バイスなど意見交換をします。医療

の世界でチーム医療をするのと同様

に、私たちもまたチームで生徒指導

を行うためです」

教科を超えて、若手もベテランも「丸

となる」として、新しい課題も見つかり、

一人ひとりの生徒にとってより最適な

指導法を作り出すことができるのだ

ろう。もちろん生徒に対しても週1

回のマンツーマンの面談を取り入れ

ている。学習の進捗状況を確認し、

その週の学習計画と一緒に考えるの

だが、この時にも苦手教科の担当と

連携したチーム指導が生きてくる。

紹介している。

「たとえば、進行性筋萎縮症の患者

さんの会や、発達障害をもつ子ども

たちの学習支援など。難病では治療

だけが医師の仕事ではないこと、病

域や行政との連携が必要であるこ

となどをもって理解します。こう

の根幹となる「医のアート」だ。これは、医師の役割や医療を取り巻く社会、医学まで教科以外に医学部で学ぶための資質や目的意識を高めるためのカリキュラムで、週1回の授業だ。

ほとんどの国公立・私立ともに面接・小論文が導入され、勉強だけできても合格できないようになっている。その一方で、苦手教科があつても面接・小論文で逆転合格することも可能だ。

平均点が高くなる地方の公立校の場合、8割以上の点数をとらないと合格圏に入りませんが、面接で人間性を評価されれば差をつけることがあります」

しかし、人格形成は一朝一夕でできるものではない。入試直前の面接対策だけでは、すぐにメリッキが剥がれる。そこで、YMSでは1年間をかけて

「医のアート」で、人格形成の手助けをし、医師志望理由を熟成させる。

そこで、YMSでは1年間をかけて「医のアート」で、人格形成の手助けをし、医師志望理由を熟成させる。

そこで、YMSでは1年間を



# 私大医学部受験のいま

## ～入試情報と予備校選びのポイント～

少子化が進むなか、依然として高い人気を集める医学部。私立大学の医学部では志望倍率が20倍、30倍が普通で、なかには70倍を超えるところもある。超難関となった医学部入試を突破するには、志望校を早期に絞り込み、医学部専門予備校などをパートナーに本格的な受験対策に取り組むことが重要だ。難化の一途をたどっている医学部受験の現状と予備校選びのポイントを探ってみた。

### 医学部人気で続く激戦 倍率が70倍超の私大も

なぜ、医学部はこれまでに人気なのか。背景にあるのは経済の長期低迷を通して強まった「資格志向」と、医師という職業が持つステータスや安定性への憧れだろう。

医学部をめざす受験生は増え続け、2007年度から2016年度の間に34・6%も増加している。

一方で、大学医学部の入学定員も医師不足の解消を目的に10年で21・5%増えている。2018年度の大学医学部の入学定員総数は9419名。1997年から2007年までの約10年間は7625名に抑制されていたが、2007年に制定された「緊急医師確保対策」により7793名にさるに2009年に8486名に増員された後は毎年定員増が行われてきたのだ。

2018年度の医学部定員の内訳を見ると、国立大が4923名、公立大が844名、私立大が3652名となっている。なかでも私立は、2016年に東北医科薬科大、2017年に国際医療福祉大が新設されるなど、定員を大幅に増やし、存在感を増している。

こうした定員増にもかかわらず、医学部志願者がそれをはるかに超えて増加したことで入試は難化。志願増が定員増を大きく上回る傾向が続き、厳しい入試を招いている。難度は高まるばかりで、医

### 受けやすくなった私大医学部 学費値下げや奨学金制度を充実

私大医学部の人気が高まっている大きな理由の一つに、学費の値下げや奨学金制度の拡充がある。国公立大医学部の学費は6年間で350万円程度だが、私立大の場合、その額は20000万から40000万円にのぼる。全国に31校ある私大医学部のうち、18校は総額3000万円以上が必要だ。

国公立大に比べて高い学費が私大医学部受験のネックになってきた。そうした状況を解消するため、最近では学費を値下げる試みも少なくない。2008年に順天堂大が6年間の学費を約900万円下げたのを皮切りに、昭和大、東邦大、帝京大、東海大、藤田医科大学、愛知医科大学などが学費の値下げに踏み切った。2018年度には私大医学部御三家の一つ、日本医科大学が学費を570万円下げ、6年間の総額を2200万円に減額し、大いに注目を集めました。また、2017年度に千葉県成田市に新設された国際医療福祉大は、学費が6年間で1850万円と私大医学部の中では最も安く設定されて

学部はある学部の中でも合格を手にすることが特に難しい狭き門になった。今や私大医学部の志願倍率は20倍、30倍が普通で、70倍を超える大学も。他学部では見られない超激戦が続いている。

また、地域医療への貢献を前提に学費が減免される地域枠入試を実施する医学部もある。卒業後の定期間、指定された病院や診療所などで勤務することを条件に学費を全額免除したり、奨学金の返還を免除したりする制度で、地域医療を担う医師の育成を狙いつつある。現在、国公立大の約2割、私立大の約1割が実施しており、杏林大学医学部の東京都地域枠入試の2017年度入学生の場合、東京都地域医療医師奨学金制度の対象になれば、6年間の授業料に加えて毎月の生活費10万円が貸与され奨学金の総額は約4400万円になる。貸与とはいえ、指定された医療機関で一定期間勤務すれば返還は免除される。こうした制度は大学ごとに異なるので、志願校選びの際にぜひ確認してほしい。

受験者にとって学費の値下げなどによる経済面での負担軽減はう

